

論 文

## 「荒れる成人式」考

小 針 誠

現代社会学部・現代こども学科

## 1. 本稿の目的

本研究の目的は、ここ数年の間に、すっかり馴染みの風景になりつつある「荒れる成人式」を問題対象にして、以下の課題を明らかにすることにある。すなわち、20歳を「成人」とみなし、「成人式」なる通過儀式が全国規模で、しかも各自治体が執り行う公的行事になったのかという歴史的な関心を踏まえつつ、昨今の成人式の式典がなぜ「荒れる」のかについて考察することにある。

文部科学省が調査した「平成12年度 成人式実施状況調査」によれば、新成人のいる市町村数3,249のうち新成人がごく少数であった2村を除く3,247(99.9%)が実施し、うち95%に当たる3,081の自治体が記念式典を開催し、約3割に当たる1,015市町村がこうした式典を教育委員会単独で開催している。

筆者の管見するところによれば、「荒れる成人式」がマスコミを通じて世間一般に大々的に注目されるようになったのは、先の調査が実施される2年前の1999(平成11)年の前後ではなかったかと推定される<sup>1</sup>。特に注目されるきっかけとなったのが1999年1月に行われたある地方都市の成人式の記念式典であった。同式典では、マスコミに頻繁に登場する大学教授が「知的探求」を演題に記念講演を行った。ところが、講演開始後も会場内外で絶え間ない私語や携帯電話など、まるで講演に聞く耳を持たない新成人たちの様子に大学教授は半ばあきれながらマナーの悪さを指摘し、その後市長が大学教授に対してお詫び状を出す一幕もあった(1999.1.20朝日新聞・朝刊)。

1999年を前後して、式典の会場内外で暴れる者、式典の進行を妨害する者(そうした振る舞いに対して首長が怒鳴ることもあった)、新成人同士あるいは式進行を取り仕切る職員に対して暴力行為に及ぶ者が現れ、暴行・傷害などの容疑で相次いで逮捕者が出ることになった。逮捕者の発

生する事件には至らないにしても、来賓や首長が祝辞を述べている間に私語や携帯電話・メールに夢中になっている新成人の様子を報道するマスコミの内容や論調は、「荒れる成人式」ひいては成人式というセレモニー自体のあり方に対して、大きな疑問を投げかけているように見える。

成人式に対する世間一般の評価・反応はどうだろうか。それを明らかにする上で参考になるのが以下の調査結果である。朝日新聞社は、「荒れる成人式」が全国各地で起きた直後の2001年1月20日・21日の両日に、「市町村主催の成人式を続けた方がよいか、やめた方がよいか」について全国の1192名を対象に電話アンケートを行い、〔表-1〕の結果を明らかにしている(2001.1.28朝日新聞・朝刊)。

それによれば、各種メディアを通じて「荒れた成人式」を認知した直後であるにも関わらず、「やめたほうがよい」(中止)と回答した者が47%と圧倒的に多いわけではなく、「続けたほうがよい」(継続)の割合(43%)とほぼ拮抗している。また、「やめたほうがよい」と回答したなかでも、「マナーの悪い参加者がいる」という成人式の荒れに問題の要因を求めるよりもむしろ「内容が形式的」「意味がない」「役所がやることではない」など既に成人式の式典のあり方そのものの形骸化を批判する声のほうが大きい点に注目する必要があるだろう。

これを世代別に見ても、20代と40代では「続けたほうがよい」と「やめた方がよい」がほぼ拮抗しているのに対して、30代、50代、60代では「やめた方がよい」が「続けた方がよい」を大きく上回り、70代では唯一「続けた方がよい」が「やめた方がよい」を上回っている。このデータを見る限りにおいては、年齢(世代)による相関関係をはっきりと見出すことはできない。

また、成人式を主催する自治体のなかには、「荒れる成人式」が頻発する現状とその対策として、式典への参加を申込制にしたり、タレントや歌手などの有名人をゲストとして呼んだり、東京ディズニーランドなどのアトラクション施設に招待するところまで現れている。そうした各自治体の「苦肉の策」でさえも新成人への迎合であるとして、

〔表-1〕市町村主催の「成人式」は続けるべきか、否か(朝日新聞社調査 2001年1月) n=1192

意見	割合	理由
続けたほうがよい	43%	二十歳になった節目30%、同じ世代で交流7%、恒例行事4%、その他・答えない2%
やめたほうがよい	47%	内容が形式的21%、マナーの悪い参加者がいる14%、意味がない6%、役所のやることではない5%、その他・答えない1%
その他・無回答	10%	

註)小数点以下は四捨五入

これもまた批判の対象になっている。

このように、現代の日本における成人式というイベントをめぐる状況は極めて混沌としている。これは単に大人と新成人との間で生じるディスコミュニケーション (discommunication: 意思疎通の欠如) だけを以って論じられる問題ではない。ディスコミュニケーションは「荒れる成人式」の実態を示す言葉であって、問題の要因や背景を説明してはいないからである。

本研究では、「成人」という当該社会のなかで「一人前」(大人) とみなされることを印付けるイベントとしての成人式がなぜ問題になるのか、当該社会において「一人前」とはどういうことなのか、さらに当該社会において「一人前」とみなされる人間がなぜ公共の場(公共圏)で暴れるのかなどについて、現代の青年像と成人式という公的行事のあり方を通して検討してみたい。

## 2. 成人式の歴史

成人式は、子どもから大人へと移行するときの通過儀礼であり、共同体のなかで、未だ共同体の構成員として認められていない未熟な者(子ども)を、一人前の共同体の一員へと変身させる、制度的な仕組みである。つまり、成人式とは、未熟な共同体への参入者の社会化のための手段として捉えられる(矢野2000: 48)。

成人式あるいはそれに類した儀式や習俗は、国・地域による差、時代差、文化差、性差こそあれ、世界の様々な国・地域で実践されている。その多くは、現代日本の成人式のように「成人=20歳」という年齢主義に基づくものではない。文化人類学の知見が明らかにするところによれば、たとえば男子においては獲物を一人で仕留めることができるなど生活・経済上の基盤を独力で築くことができること、女子の場合は初潮を迎え、出産するうえで身体の準備ができてくることを「一人前」とみなし、それに対して行われる習俗一般を指す。

つまり、成人式とは、当該社会において「一人前」への

移行(トランジション)をしるしづける儀礼であり、必ずしも肉体的成熟と対応しているわけではないが、それでも多くの場合、成人式を行う前提には一人前としての性的成熟があり、年齢上でいえば10歳前後から15歳前後と広範にわたる思春期に何らかの形で執り行われる儀礼であることが多い(大林1979)。

日本の成人式(成年礼)は、「元服」や「首服」として中国より輸入・翻案され、奈良・平安時代に皇族や貴族において成立した儀式を起源としているといわれる。元服では、大人の待遇を与えていない子どもとしての「大童」(おおわらわ)の垂髪から、結髪し、烏帽子を加冠することが儀式として実践された(芳賀1991)。その元服の行われる年齢について、尾形(1950)が明らかにしたところによれば、天皇ないしは皇太子が元服を迎えた平均年齢は、奈良時代14.0歳、平安時代13.18歳、中世13.86歳、近世12.31歳であり、概ね12~14歳前後の人物を一人前であるとみなし、「成人」の儀式を行っていた。中世に入ると、宮廷・貴族層で行われていた元服の儀式が武家層にも普及し、戦士としての資格付与、家督相続・婚姻などの身分法的な必要性、成人として踏まなければならない慣例的儀式となった。

庶民層における成人式(成年礼)は、地域や時代による違いこそあれ、貴族や武士層と同様に「元服」の儀式をもって行われているところもあれば、村などの村落共同体における若者組(娘組なども含む)への加入をもって行われることもあった。若者組に加入した者たちは地域社会の成人としての規範を本格的に内面化していくことになる。

庶民層における成人式の儀式・習俗もやはり先の文化人類学の研究が明らかにしたのと同様に、身体的成熟(身長や精通・初経などの性的成熟)と実年齢(数え年)などを基準に勘案しつつ行われたものである。たとえば、女子の成年礼の行われていた年齢は、概ね13歳前後ではなかったかと推定されている。これは、生まれ年の干支の一巡、すなわち数え年13歳が初経を迎える大凡の年齢であることから成年として意識され、女子にあっては初経祝いであり、

初経の年齢を根拠に十三祝いが生じ、さらに十九の厄年が今日の成人式になったという説もある（鎌田1990：7）。

今日では満20歳に達したら成人である。これは民法において満20歳を以って成人とするとある通りである。ただし、20歳未満で婚姻した場合はその時点で「成人」となる。こうした認識は、素質・環境の個人差こそあれ、人間の行為能力はだいたい年齢と平行して発達するのが普通であり、意思能力も含めて、満20歳を経た成年期にだいたい備わっているだろうという前提に基づいている（谷口・石田1988）。

現在のような自治体主催の成人式は、1946（昭和21）年11月に埼玉県蕨町（現・蕨市）で行われた「成年式」に起源を求めることができる。戦後復員して虚脱状態にあった若者たちを元気づけようと、1926（大正15）年から1928（昭和2）年の間に出生した在町の青年たちを対象に、蕨町と同町の青年団が共催したイベントが後に全国に広がっていったといわれる。第一回成年式の式次第によれば、蕨町長の挨拶、県選出議員もしくは県議の来賓祝辞、成年者代表の「誓の詞」が予定されているなど、現在の成人式の式典の原型がここで形作られていることが確認できるのである（蕨市生涯学習課のホームページより）。

この2年後の1948（昭和23）年7月には、国民の祝日に関する法律の施行により、「大人になったことを自覚し、みずから生き抜こうとする青年を祝い励ます日」として、小正月の1月15日を「成人の日」として制定した。

ところが、「成人の日」に対する世間一般の関心は低く、1956（昭和31）年の文部事務次官の通達により、式典や記念行事等について「この日は、全市町村あげて新しく成人となったものを祝福するに相応しい行事を実施することが望ましい」という考え方が示され、以後全国ほぼすべての市区町村が成人式の式典や記念行事を主催するという現代のスタイルが確立された。

現在では、2000（平成12）年の法律改正に伴い、1月の第2月曜日を「成人の日」とし、この日を中心に日本では各市町村で自治体などが主催の下、地域によってその形態は若干異なるが、成人の祝いを目的として、さまざまな催しが行われている。

### 3. 「荒れる成人式」から見えてくる新成人像

先の大学教授の講演を前後して、成人式の式典ではどのような「荒れ」があったのだろうか。逮捕者が出た、あるいはマスコミに大きく注目された代表的な事件を以下に列挙してみよう。ここで挙げたものは成人式当日に会場内で

発生したもののみを抽出した。

- 1998年、神奈川県厚木市で成人式のアトラクションとして開かれていたコンサート中に、酒に酔った新成人3名が壇上に向け登り、職員らともみ合いになり、式が一時中断。塗装工と運転手の2名が傷害の容疑で逮捕される。
- 2001年、高知県高知市の成人式式典会場で挨拶に立った県知事に対して数人が「帰れ、帰れ」と手拍子を打ちながらヤジを連呼、知事が「静かにしろ」「出ていけ」と叱ったところ、逆に「お前が出ていけ」と言い返した。逮捕者はなかったが、このときの様子はマスメディアに大きく取り上げられ、注目された。
- 2001年、香川県高松市の式典で祝辞を述べている市長に向かって至近距離からクラッカーを鳴らす。無職、建設作業員、会社員、防水工、塗装工の5名（いずれも男性）が威力妨害容疑で逮捕される。
- 2002年、沖縄県那覇市で、成人式の会場に酒樽を持ち込もうとして警官隊ともみ合いになり5人が逮捕。那覇市内の男子大学生が公務執行妨害の疑いで緊急逮捕。
- 2004年、沖縄県浦添市で、数人の仲間と酒を飲んでいて、通りかかったグループともみ合いになる。鉄筋工の男性が暴行の容疑で逮捕される。
- 2004年、大阪府交野市で開かれた成人式・式典で、無職の男性が演壇で祝辞を述べていた市長の額に生クリームを投げつけた。
- 2004年、兵庫県高砂市の会場で、男性会社員がとび職の男に因縁をつけられ、顔などを殴られた。とび職の男は高砂署に傷害容疑で緊急逮捕された。
- 2004年、宮城県古川市で、酒に酔った参加者ら数十人がもみ合いになる。消防署員が駆けつけたところ、新成人らが署員の頭を叩いたり、救急車を蹴り、車体に傷をつけたという。このうち無職の男性が公務執行妨害と器物損壊の疑いで逮捕される。
- 2004年、静岡県伊東市で、10数名の男性が開式前から酒を飲み、壇上でズボンを脱ごうとしたり、花瓶の花を食べたり、懸垂幕として掲げていた市民憲章を破るなど暴れる。その後、暴力団に属する建設作業員と無職の2名が別件で逮捕される。

このほかにも新成人の一部が会場内外で酒を飲んだり、立小便をして、一般市民に迷惑をかけるなど、「荒れる成人式」の事例には枚挙に暇がない。

成人式に参加する新成人の意識をこれまでの学術研究ではどのように捉えてきたのだろうか。

2002年に地方都市の成人ならびに新成人に質問紙調査を行った古賀(2004)によれば、成人は新成人に比べて「大人」意識が強く、成人式に参加した成人ほど強い「大人」意識をもっている。しかしながら、成人式不参加者のほうにむしろ規範遵守的な態度が見られるという結果が明らかになっている。

また、成人式の式場ないしは会場で事件を起こし、逮捕された新成人の属性を見ると、無職や零細産業に従事する男性でほとんどが占められている。こうした事実注目し、「社会的アイデンティティ」という理論枠組みから説明を試みたのは森(2005)である。森は、原孝『喋りたい若者たち 喋らせない大人たち』(2002年刊)に登場する、成人式で荒れた若者の発言内容と彼らの属性(学生時代は「落ちこぼれ」で、現在は大学生ではなく無職であることが多い)に注目し、暴れるのは、彼らが「よい子」「優等生」である大学生との対比で、「落ちこぼれ」としての自らのアイデンティティを強く意識しており、そのために「遊びのエネルギーや度胸がなみはずれていること」「中途半端でなく徹底的にやること」「権威や権力をこわがらないこと」をもって、「落ちこぼれ」としてのアイデンティティの保持に努めているからだという。

つまり、成人式で暴れることは、その対象となる権威(式を主催する教育委員会や祝辞を述べる首長や来賓など)のみならず、「よい子」である大学生に対する威嚇と集団で抵抗することを通して、自らのアイデンティティの保持に努めているのではないだろうか。卒業した学校単位で集まることの多い成人式の式典を「学校行事の再現」として捉えるならば、彼らは、学生当時の<sup>ポジション</sup>位置や役割(「落ちこぼれ」や「ヤンキー」であったかもしれない)を、再現しているようにも見える。

しかしながら、すべての「落ちこぼれ」や「ヤンキー」が荒れているわけではないし、大学生も暴れている場合もあるし、その荒れの程度も私語から首長への暴力行為など様々である。あるいは、成人式は大学生・優等生中心に形成されているイベントであると見る森の捉え方は一面的であり、その実態を十分に捉えきれているようには思われない。

以下では、会場内で起きる「荒れ」(私語から暴力まで)に注目して、そこで生じるコミュニケーションの様態を分析することによって、荒れる成人式の原因について考察を試みたい。

#### 4. 位階的秩序の崩壊

「荒れる成人式」の背景にあるのは、道徳やマナーの欠如というよりもむしろ、それらを成立させる前提条件の崩壊にあると見るべきである。以下では、その問題の要因について、若者の親密圏・公共圏の変容と「他者」の喪失の問題として考察を試みよう。

成人式における祝辞を述べる側を「教える側」とし、祝辞を聞く側を「学ぶ側」だとする前提に立てば、この関係が大きく崩れることこそが「荒れる成人式」にほかならない。そこには「教える-学ぶ」関係の間で起こっている劇的な変容を見逃すわけにはいかない。

田中(2002)によれば、近・現代社会の教師(ここでは広く「教える側」と捉える)は、位階的秩序を前提として、二重のモードにおいて存在してきたという。その第一は、教師が教育システムの機能の具体的な装置として、唯一神・主権国家・実証科学によって支えられた「知」を独占している超越的な審級によって保証された代理審級というモードとしての存在であり、第二には教師が子どもとの円滑な人間関係をつくりだす装置として、つまり学ぶ当事者の意識のなかに生じる事後心象というモードとして存在していた。つまり、「教える」という行為が成立するのは「学ぶ」という行為の成立した後に生じるものである。人は「学んだ」あるいは「わかった」と思った後になってはじめて人から「教えられた」と思う。要するに、「教える」という行為の成否は学ぶ側の事後的な審級に委ねられることになる。

しかしながら、近代社会において成立した機能システム<sup>2</sup>(Luhmann, N., 1984=1993訳)から「位階的秩序」が喪われた結果、教師は教師、医師は医師などそれぞれの社会的機能を遂行している人物に過ぎなくなり、かつてのように権威をもち信頼される時代が終わりつつある。それどころかむしろ教師として、医師としての機能への期待のみが特化・肥大化し、1980年代後半から90年代以降に子どもや若者が学習したものは、位階的秩序という障害に邪魔されない自己選択の自由(気楽さ)であり、教師や医師は、あるべき方向を指し示し、押し付ける「指導者」から、自己選択を支援する「助言者」への役割の変化を余儀なくされた。

ここでいう「指導者」と「助言者」の区別については、社会学者であるジークムント・バウマンの指摘に従えば、「指導者は命令をくだし、規律への服従を要求できるが、助言者は、相手が意見をすすんで聞いてくれることに期待

しなければならず、意見を聞いてもらうために助言者は、まず、聞き手の信頼を勝ち取らなければならない」(Bauman, Z., 2000=2001訳:84)のものである。

教師は、子どもの教育や規律ではなく、子どもの発達を支援する者であり、「子どもと共に学ぶ」姿勢が求められることになる。医師は、専門的な知識に基づいて患者を治療するものではなく、患者と同じ視線に立って患者とともに治療に向けて努力する存在として位置づけられる。

先のパウマンの区別に従って、成人式の式典で挨拶や講演をする首長や来賓はもはや「信頼」を勝ち得ていない、むしろ多くのものにとっては何者かもわからないため、「指導者」ではありえない。

それにも関わらず、「指導者」を装って、新成人に対して「ためになる話」や説教をしたところで、誰も聞く耳をもたないだろう。むしろ、久しぶりに会った旧友と私語に興ずるほうが楽しいことだろう。また、座って話を聞くように無理に強制すれば、逆に反感を招きかねない。

先にあげた地方都市の成人式における大学教授の祝辞のときも、新成人からは「ここに来るのは友達に会いたいからで、だれかの話を聞きに来ているわけじゃない。話を聞かせようとする市長の方が間違っている」と真顔で批判されたという(1999.1.20朝日新聞・朝刊)。

今も昔も成人式の式典の祝辞など、多くの場合、「聞きたくもない」類に属する話であろう。間近に控えた選挙の挨拶や演説のためだけに来るような地元の名士や議員の祝辞など、はっきりいえば迷惑千万である。だが、この種の「聞きたくない話」への対処の方法として、公共圏にいる位階的秩序の下位に位置する者(聞き手)に与えられているのは、「聞いているふりをする」(偽装的関係の維持)か、そもそも「会場(公共圏)に現れない」(拒否)という2つの選択肢であった。そして成人式が「荒れる」以前は、虚偽的關係や拒否を前提にして成立していた。すなわち、「話をしてあげる」と「話を聞いてあげる(聞いてあげるふりをしてあげる)」という互助関係のもとに成立していたといえる<sup>3</sup>。あるいは、式典で聞きたくもない話を聞かされるなら、そもそも会場に入ることすら拒否すればよかった。

しかし、成人式の式典において、祝辞を述べる市長も講演者も親密圏外のすべて「他人」であり、単なる「風景」に過ぎない。風景に同化する「他人」の話(祝辞)はただのノイズであり、ノイズに対しては、もはや耳を傾ける必要はなくなる。聞かなければならないものだと諭されても、位階的秩序の崩壊を前提にしたとき、「なぜ聞かなければ

ならないのか」はわからない。「聞いたふりをしておく」という前提となる虚偽意識さえもここでは見当たらない。

つまり、私たちのよく知っている光景としての「教える一学ぶ」関係は相互の虚偽意識によって成立している擬似的関係であるともいえる。あるいは、聞かない方法の変容であるといってもよい。

## 5. 公共圏の変容

私語にしても、暴れるにしても、荒れの問題は成人式の式場内という「公共圏」において生じる問題であり、現代の若者たちの「公共圏」に対する意識や構えの変容も重要な論点のひとつになるだろう。

土井(2003および2004)は、現代の青年像について、親密圏にいる人間に対しては関係の重さに疲弊するほど高度に気を遣っているけれども、公共圏にいる相手に対しては匿名的な関係さえ成立しないほどにまったくの無関心であるという実像を浮き彫りにしている。

たとえば、親密圏の人間に対する関係の重たさという点についていえば、2004年6月に長崎県佐世保市で起こった小学校6年生の女子児童殺害事件が挙げられる。「親友」が「インターネットの掲示板に容姿や性格についての悪口を書かれた」ということで「親友」を殺害したが、土井はそこから現代の子どもたちの友達関係・親友の「関係性の重たさ」を看取している。

それまで「親友」といえば、お互いの対立や葛藤(ケンカ)を経験しつつ、訣別と和解を繰り返しながら、揺ぎ無い関係を築いていく関係性を指していたが、この事件で顕在化した子どもたちの人間関係は、お互いの違和感が顕在化しないように高度に気を使いながら、友達関係をマネジメントしている姿であった。あたかもガラス細工を扱うように、恐る恐る人間関係や他者の「こころ」を管理する「感情マネージャー」(Hochschild, A. R., 1983=2000訳)としての最近の若者・子どもにとって、「優しい関係」を構築する上で、テクニックとしての「優しさの技法」が常に要求されている。

日常会話で「とりあえず食事とかする?」「ウタシ的にはこれに決めた」「(何でも) かわいい」「(何に対しても) ビミョー」などの「ぼかし表現」や携帯メールでの絵文字の普及などは、日常生活の中で親密な他者(intimate stranger)と付き合う上で、対立点を避けるために用いられる手段としての表現方法である。つまり、彼らは、自分の発言・主張をぼかすことで、明らかな対立点を隠蔽し、

相手の立場や意見を慮ろうとしているのである。子どもや青年たちの親密圏で高度に配慮しあう人間関係が広がっているのは、相手への思いやりではなく、スムーズな人間関係を維持することに最大限の配慮をしようとするからである<sup>5)</sup>。

しかしながら、親密圏の外側に位置する公共圏においては、「優しい関係」で配慮の対象になるのは親密圏にいる他者のみで、親密圏の外側にある一般社会である「公共圏」にいる他人に対してはまったくの無関心・無配慮になる。

たとえば、親密性における関係の無化としての暴力には、「キレル」「ムカつく」あるいは「いじめ」などが挙げられる。最近のいじめは、以前のようにネガティブな特徴を持った子どもが被害者になるのではなく、誰でもいじめの対象になるという。これは子どもたちの親密圏に由来する関係性によるところが大きい。子どもたちは自らの存在を安泰なものにするために「優しさ」を演じ、その反動として集団への同調を過剰に強いる。そのため、いじめが発生しても加害者を注意してやめさせることはできない。ほかの人と同じように笑って見過ごしたり、場合によってそのいじめに参加しないと、次は自分がいじめの標的になるかもしれない。最近の少年犯罪が集団性を帯びるのは、一旦その集団・グループのなかに犯罪をしてもいいとする雰囲気漂うと、その雰囲気に誰も逆らえなくなる仲間集団の構造があるからだという。

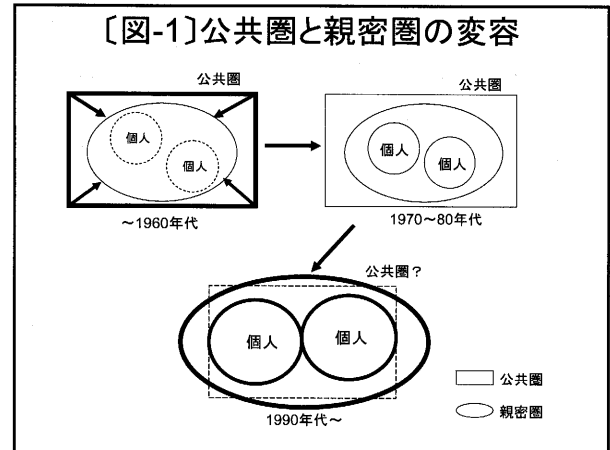
その一方で、電車内などの公共空間（公共圏）で、携帯電話で大声で話す高校生、電車のなかで靴下を履き替えたりする女子高生や化粧をする女性、人目を憚らず抱擁しあう若いカップルなど自分の欲望の赴くままに振舞う人々も存在する。

これは周囲の他人が意味ある人間である「他者」して認識されていないことによっている。マナーやモラルに対する無知というよりもむしろ、彼ら・彼女たちにとっては、周囲の人間が「意味ある他人」、すなわち「他者」として認識されていないのである。これは公共圏においてマナーが成立するための前提条件であるが、そもその条件が不在なのである。親密圏にいる「仲間」以外はただの「風景」に過ぎず、そこにいる人々は「意味のある他者」(significant others)ではなく、「意味のない(赤の)他人」ではない。

正高(2003)によれば、家の自室のみを私的空間とし、公共圏に出ることに恐怖感を抱く「ひきこもり系」と、公共圏でさえも自室と同じような感覚(無感覚)でいられる「ルーズソックス系」(公共圏で人目をばからず欲望の赴

くままに行動する人)とは、私的空間から公共圏に出ることを拒絶する「家のなか主義」を共有している点で共通しているという。

ここで公共圏と親密圏の変容を図示すると〔図-1〕のようになる。



近代社会の成立から1960年代までは、国家や地域社会の主導のもとで「公共圏」が構成され、個人はそのなかに埋没せざるを得ず、個人は国家や地域社会に対して「滅私奉公」を強いられる場面が度々あった。たとえば、戦前期における徴兵制や総力戦体制下の隣組の組織化などに見られるような国民の政治的主体化、そしてその反動形成としての戦後の高度経済成長期における経済的主体化など、いずれにしても親密圏のあり方は国家・地縁・血縁・地域共同体・職場・学校などの公共圏の影響を大きく受けていた。

しかしながら、1970年代以降になると、そうした近代社会のあり方に構造変容が生じ、それまでの「公共圏」のあり方に大きな亀裂が生じた。個人としての基本的人権が尊重されるべきだとする人権論的な発想・観点から「個」のあり方が尊重され、公共圏の抑圧性に対して異議申し立てが行われた。その結果、それまで存在していた公共圏は個人や親密圏からの退去を余儀なくされ、強い影響力をもちえなくなった。

さらに、1990年代以降になると、それまで存在していた公共圏の存在は、過去の「幻想」としてすっかり色褪せてしまった。その代わりに、「他人に迷惑をかけなければ何をしてもよい」を金科玉条に、「個性」や「自分らしさ」を大切にすることを至上価値として強調されてきた若者の「個」のあり方は肥大化していった。その一方で、若者たちは、「個」を生かすために、過剰なまでの誠実さをもって過酷なまでの親密圏を構成し、生きようとしている。し

かしながら、親密圏がそれ以前に比べてさらに強化されればされるほど、それまで存在していた公共圏は無化することになる。それ以前の世代の人間からみれば、そうした若者のあり方は公共圏（公共心）を喪った「むきだしの個人」としてしか映らない<sup>6</sup>。そこで保守的・復古主義的な思想をもつ者は、公共圏・公共心の問題を「愛国心」に摩り替えて、その復権を唱えようとする<sup>7</sup>。

たとえば教育社会学者の蓮尾直美は「荒れる成人式」に対するコメント・意見として次のように論じる。

昨今の成人式における若者たちの行動様式から読み取れる物の見方や考え方について、常々思うことは、総じて「幼くなった」ということである。……（中略）……大人となるべき儀式として「成人式」の象徴的な意味を解さない若者たちの幼さは、詰まるところ、戦後六十年かけて経済優先に展開された価値体系の下で、わが国の歴史や文化を否定してきた戦後教育の帰結であろう（産経新聞 2005年1月19日・朝刊）。

この種の思考や言説は、単純な図式・枠組を前提としており、原因と解決策が明示的であるがゆえに、比較的受け入れられやすいという特徴をもつ。しかし、それだけで問題が解決するほど事態は単純ではない。

## 5. おわりに

昨今の「荒れる成人式」の問題背景を明らかにするうえで、本研究が特に注目したのは「荒れる成人式」の社会的背景にあるものと若者たちの人間関係の変容である。

本研究の考察を踏まえれば、一人前＝成人としての実際の年齢と規範のズレが明白であるにも関わらず、あるいはまた成人そのものの多様化あるいは成人基準の多様化によって成人式という儀式そのものの形骸化を深めているにも関わらず、たまたま生まれて20年経っただけに過ぎない人間のモラルやマナーの欠如を指摘して、特定の道徳原理を説くことにどれほどの意味があるのだろうか。チュダコフ（Chudacoff, H. P, 1989＝1994訳）の指摘によれば、そもそもこの種の年齢規範こそ近代化された人生の規範的な形式やルールを提示しているに過ぎない。

しかしなお、こうした「荒れる成人式」に対して、事態の改善を望む声は止むことはないが、十分な解決策に至っていない。たとえば、大人の権威や戦前の教育勅語といった特定の思想やイデオロギーの復権を唱えて、それらを教

条主義的に翳す保守思想などは意味があることなのだろうか。そのオルタナティブとして正義やケアについて論じることも大切ではあるが、これもまた問題の核心に迫ることはできないように思われる。教育（教化）することによって、問題解決に至るほど単純なことなのだろうか。意味をなさないだけならともかく、やはり適切であるようには思えない。

これと同様に、「臨床心理士」を名乗る専門家がクライアントに対して行うカウンセリングなる実践もあまり意味はないし、時として有害でさえあると考える。なぜなら、カウンセラーとクライアントとの間では、アドホックな人間関係しか構築し得ない「他人」同士でしかなく、関係の冗長性をも共有する「他者」になることは大凡困難だからである。いかに熟達したカウンセラーのすべてがすべてのクライアントと「他者」としての関係は構築し得ないだろう。したがって、「こころ」——実際に「こころ」なるものが存在するのかは甚だ疑わしいのだが——を変えさせようとしても、「他人」が行う限りにおいて、カウンセリングなる実践は無化してしまう。

教育（教化）にしても、カウンセリングにしても共通しているのは、社会システムの変容に伴う若者の人間関係のあり方を等閑にしたままで、位階的秩序の上位の立つ者の「計算」に基づいて、位階的秩序が下位の人間を「善い方向に変えることができる」という認識に根ざしている点にある。たとえば、「優れた教育実践は子どもの学びを変えられることができるのだ」という教育言説、テクノロジーとしての新しい教育方法（最近で言えばロールプレイングやら体験学習やら）を導入・実践すれば、子どもの学びが豊かになり、教育問題が解決するとの信奉それ自体は、これまでの近代教育学が構築してきた楽観素朴な誤った前提にほかならない。

「学習者の気づきや発見によって学ぶ」などと嘯きつつ、位階的秩序の上位に立つ人間（教師）によって既に計算し尽されている実践など、現実の場面においては、その一切が無効になる。たとえば、教師のまなざしのもとで実践される、「いじめ」のロールプレイングなど、現実場面では一切無化される。というのも、現実に生起する「いじめ」は、誰が加害者となり、被害者となるのか、そしていつどこで始まり終わるともわからないし、ときには死に至る結末さえも想定されていないからである。

確かに教育（教化）あるいはカウンセリングを契機にして、他人が「他者」として受容され、「気付き」の契機となることもあるだろう。しかしながら、すべての人間が道

徳規範を内面化し、それを皆が同じように実践し、そうした実践が永続すると考えるのは間違いである。たとえば、松下(2002)は、これまでの道德教育が前提としてきた認知・情意・行為を、ロケットの本体・燃料・運動に準えて、「ロケットモデル」と呼んで批判する。認知・情意・行為のすべてが完璧に一致し、しかもすべての人間がこれを実践することは、有史以来存在しなかったことからわかるように、不可能かつ危険な試みであろう。

人間を「どうにかする」ためには、どう「教育」(教化)するのかを規範的に問題にし、理念的に論じることではない。あるいは、「こころ」に訴えかけることでもない。「どうにかなる」のかどうかは、「どうにかしようとした」対象や客体の事後審級に委ねるほかはないのである。そうした教育の限界や矛盾は、成人式の式典を主催する各自治体の教育委員会が最もよく熟知しているところではないだろうかと思われる。

〈付記〉本研究は、平成17年～平成19年度文部科学省科学研究費補助金・若手研究(B)「心理主義化する現代日本と子どもたちの人間関係の現在」(課題番号17730486 研究代表者・小針 誠)による研究成果の一部である。

### [註]

- 1 1999年以前にも私語が止まない成人式が問題になっていたことはあった。たとえば、1989(平成元)年で成人式における私語が新聞紙上で問題化している(朝日新聞1989.1.12朝刊)。その後またたび成人式と私語の問題は新聞紙上を賑わしてきたが、逮捕者が出るなどした1999年あたりを前後して、本格的に「成人式」と「荒れる」という用語がセットになって論じられるようになった。
- 2 機能システムにおける「機能」とは、問題を解決したり、目的を達成する代替可能な手段の働きを指す。近代社会の成立に伴い、社会のあらゆる制度で全面的な機能的分化(法システム、教育システム、医療システム、経済システム、政治システムなどへの機能の分化)が生じ、それぞれ個別の機能をもつようになった(Luhmann, Niklas., 1984=1993訳)。
- 3 たとえば、1966(昭和41)年1月16日の読売新聞・中央版には、東京都千代田区の成人式の取材記事が掲載されている。これは、記者の目線から見た当時の成人式の様子を伝えるものとして非常に興味深い。「幕が

あくど、金びょうぶに日の丸と区の旗。ずらりと並んだ区長、区教育委員会委員長、区議会議長、区選管委員長がつきつぎに立って、かたくるしく、あるいは重々しく祝辞を読む。『日本国民としての自覚……』『日本人の誇りと祖国愛……』。こんな「朗読」にキチンと拍手を送る若者たちの礼儀正しさには、頭が下がるほどだった(傍点は筆者による)。おそらく、これら来賓の祝辞に耳を傾けていた者は極少数であっただろう。しかし、それでも、話が終わるまでは黙って聴いたふりをし、話が終わればとりあえず拍手を送るという「形式」がそこにはあったのである。

- 4 公共圏とは、一般に、私的な親密圏(親密空間)に対比される公的な性格や価値を帯びた圏域を指す。その公共圏は、ユルゲン・ハーバーマス(Habermas, J., 1962=1973訳)が明らかにしたように、近代国家から市民社会が分離するとともに成立した歴史的概念としての「市民的公共性」(bürgerliche Öffentlichkeit)を含むものである。「市民的公共性」とは、市民がサロンやカフェあるいは新聞・雑誌などを通じて公共の場で批判的な論争を行い、社会的合意や規範を形成していく可能性をもった公共的関心のあり方を指す。
- 5 藤村(1997)は、自分の周りに「友達」や「親友」を名乗る人間はいっぱいいるけれども、孤独感を拭いきれない感情を指して「みんなぼっち」という概念を提起した。
- 6 「公共圏」が幻想化・後退するなかで、「むきだしの個人」にさせられた若者たちは、より「大きなもの」(国民国家)が目の前に現れると、それに無批判に飛びつき、不安を解消する傾向があるという。香山リカ(2002)によれば、1990年代以降、この種の無邪気で屈託のない愛国心である「ぶちなショナリズム症候群」が日本の若者の間で顕在化しているという。
- 7 公共圏の再生・復権を目指そうとする教育研究者に対して、宮台ら(2002)は既に崩壊した公共圏再生の試みにはリアリティがないと批判し、個のあり方や自己選択・自己責任を強調するリベラリズム教育社会論を展開し、学校解体の試みを提唱する。

### [参考文献・引用文献]

- Bauman, Zygmunt., 2000, *Liquid Modernity*, Cambridge: Polity Press. 森田典正(2001)訳『リキッド・モダニティ 液状化する社会』大月書店。



- Chudacoff, H. P., 1989, *How old are you?: age consciousness in American culture*, Princeton University Press. 工藤政司・藤田永祐 (1994) 訳『年齢意識の社会学』法政大学出版局。
- 土井隆義 (2003) 『非行少年の消滅 — 個性神話と少年犯罪 —』信山社。
- (2004) 『「個性」を煽られる子どもたち — 親密圏の変容を考える —』岩波ブックレット。
- 藤村正之 (1997) 「〈みんなぼっち〉の世界」藤村正之・富田英典編著『みんなぼっちの世界 — 若者たちの東京・神戸90's・展開編』3-16頁 恒星社厚生閣。
- Habermas, Jurgen., 1962, *Strukturwandel der Öffentlichkeit: Untersuchungen zu einer Kategorie der bürgerlichen Gesellschaft*, 細谷貞雄 (1973) 訳『公共性の構造転換』未来社。
- 芳賀登 (1991) 『成人式と通過儀礼 — その民俗と歴史 —』雄山閣。
- Hochschild, A. R., 1983, *The managed heart: commercialization of human feeling*, University of California Press. 石川准・室伏亜希 (2000) 訳『管理する心：感情が商品になるとき』世界思想社。
- 鎌田久子・宮里和子・古川裕子・坂倉啓夫 (1990) 『日本人の子産み・子育て — いま・むかし —』勁草書房。
- 香山リカ (2002) 『おちナショナリズム症候群 若者たちのニッポン主義』中公新書ラクレ。
- 古賀正義 (2004) 「青年の「大人」意識 — 地方都市での成人式調査の結果から」『教育学論集』46集 中央大学教育学研究室 87-110頁。
- Luhmann, Niklas., 1984, *Soziale Systeme: Grundriss einer allgemeinen Theorie*. 佐藤勉監訳 (1993) 『社会システム理論 上・下』恒星社厚生閣。
- 正高信男 (2003) 『ケータイを持ったサル「人間らしさ」の崩壊』中央公論新社。
- 松下良平 (2002) 『知ることの力 心情主義の道徳教育を超えて』勁草書房。
- 宮台真司・藤井誠二・内藤朝雄 (2002) 『学校が自由になる日』雲母書房。
- 文部科学省 (2001) 「平成12年度「成人式」実施状況調査結果」文部科学省ホームページ [http://www.mext.go.jp/b\\_menu/houdou/13/04/010420.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/13/04/010420.htm)。
- 森 真一 (2005) 「荒れる成人式はなぜ起きるのか？」森『日本はなぜ争いの多い国になったのか「マナー神経症」の時代』中公新書ラクレ112-144頁。
- 大林太良 (1979) 「児童観の変遷 — 成人式を中心として」向坊隆 (著者代表) 『東京大学公開講座30 子ども』東京大学出版会 187-218頁。
- 尾形裕康 (1950) 「成年礼の史的考察 — 表示様式を中心とせる —」『日本学士院紀要』第8巻第3号 347-398頁 日本学士院。
- 田中智志 (2002) 『他者の喪失から感受へ 近代の教育装置を超えて』勁草書房。
- (2004) 「ポップ感覚から浮遊感覚へ — システムに響く不協和音 —」森田尚人・森田伸子・今井康雄編著『教育と政治 戦後教育史を読みなおす』勁草書房250-281頁。
- 谷口知平・石田喜久夫 (1988) 『新版 注釈民法(1) 総則(1)』有斐閣。
- 矢野智司 (2000) 「教育の〈起源〉をめぐる覚書」亀山佳明・麻生武・矢野智司編著『野生の教育をめざして 子どもの社会化から超社会化へ』新曜社 47-68頁。
- 蕨市生涯学習課ホームページ (<http://www.city.warabi.saitama.jp/sgaku/shogai/>)